H. James 作 "The Jolly Corner" 論

——意識と潜在意識の境域をさぐるもの——

栃　原　知　雄

I

Somerset Maughamが，James の数ある短篇のなかから "The Jolly Corner" を選んで，"The Tellers of Tales" selected by W. Somerset Maugham に入れたかは興味ある問題だと思うが，Maugham はその選定の理由は特に語ってはいない。けれども Maugham らしい選び方だとはこの作品を読んだ読者にはうなずけるであろう。日本では「世界文学の100選」という名で，河出書房新社版として翻訳（土井治訳）が出たからでもあろうか，数人の読者からこの作品に関して質問を受けたので，今回はこの作品を取り上げて，James 及び James 文学の特質を考慮しながら "The Jolly Corner" 論を行いたいと思う。

"The Jolly Corner" (1909)「懐しい街角」（土井訳では「愉快な街角」となっている）は James 後期の作品の一つで，56才になる主人公 Spencer Brydon の心境の複雑さを示すもので，確かにむずかしい作品といえるであろう。（この作品を原文で読んでいる一般の読者は少ないであろうが，）原文の style はやはり難解なものであろうが，決して難解極まるものではない。Clifton Fadiman も "A Note on the Jolly Corner" で "The difficulty in reading James lies less in him than in education whose effect, if not indeed its aim, is to produce readers in whom the faculty of attention has atrophied. If James is read with sufficient slowness and care, and if he is re-read often enough, he will always at last reveal himself."[1] と述べているようにゆっくり注意深く読みとって行けば自然，James の文体の味もわかるのである。

この作品は，James 晩年の「喪失感」"the sense of loss" を遺感なく表現しているものの一つであって，56才になる Spencer Brydon という紳士が，三十年以上も母国アメリカを離れていたのであったが，ちょっとした財産を管理するために帰国する。New York の幼ななじみの目には，この主人公は，勝手気ままに生活をおくってきて，何の成果をも挙げずにいる男としてうつる。Brydon は，ふと，いまになって自分に対して疑ってもみなかった事を考えをはじめる。即ち，自分には今まで思いもよらなかった事だが，実業家としての才能があって，仮に一生をこの New York で過していたらどうなっていただろうか。この都市で自分は猛烈に仕事をして，この土地柄にそまった世智辛くされた人間になっていただろうか。そして，Brydon が下町の，Brydon の愛称に従えば「懐しい街角」にある昔の家を訪れた時，自分がいつのまにか，この「なったかも知れない別の自分」を脳裡に描くのである。この想念が執拗になるにつれて，その家に「別の自分」の幽霊でもいて，それを追いつめるかのように，夜しげしげとこの館に通うのである。（James は実に見事に絵画的手腕でこの館を読者の眼前に彷彿させる。）Brydon が何度も夜の見張を続けるうちに，Brydon の目指す相手の幽霊に出会うのである。戸口のドアの扇窓の下に，イーヴニングを着た男，両手で顔をおおって，がよくみると，手の指が二本かけている男がいる。この男がその手を下ろして，その素顔を向けた時，Brydon はぞっとするような嫌悪を感じる。その男は俗息ぶん

ぶんとした邪悪な相をおびていたのである。Brydon はその場で気絶する。この男は若し Brydon 自身がアメリカの生活をおくったら成り果てたであろう男の姿であったのだ。James はこのような話の進展のうちに，意識の瞬間的な「逆行作用」(“the flash of revulsion”) を作り出してみせるのである。

この物語のみでなく，James の作品の中には可なり多くの（16篇ばかり）の怪談があるが，潜在意識の投出ということが，James を “ghost story” に駆り立てた大きな原因といえよう。しかも，James が「死者の祭壇」“The Altar of the Dead” (1885) の自序の中で述べているように，James にとっては，怪談は常にもっとも現実性のあるおとぎ話であったのであり，Jamesは超自然的なものに現実性を盛り込んだのである。即ち James の言葉でいえば「奇怪で邪悪なもの」“the strange and sinister” が「正常でなごやかなものの素地に粉飾される」ように工夫したのである。A. R. Orage (1873–1934)[2] の言葉をかれば，James は「意識の隣の境域」“the next state of consciousness” を非常に好んだので，James は「意識と潜在意識の境域」“the borderland between the conscious and the superconsious” を作品中に探索したのである。James はこの作品ばかりでなく，この作品以外に，例えば，「友のなかの友」“The Friends of the Friends” (1895) とか，「ジャングルの野獣 “The Beast in the Jungle” (1903) とか，「モード・エヴリン “Maud-Evelyn” (1900) にも意識の逆行作用をつくり出し，「喪失感」を見事に取りあつかっている。これには Hawthorne (1804–64) と Turgenev (Henry James は Turgenev を用いないで Turgenieff の方を採用している) (1818—83) の二者の影響[3] の問題を考察しなければならないがこの小論ではこの問題にふれないで，“The Jolly Corner” の作品そのものの探索へと進む。

II

「彼が (Spencer Brydon) がニュー・ヨークを離れた時は二十三歳であった——今日彼は五十六才になっていた。彼が本国に帰ってから，時としてしみじみと感じていたことだけれど，ほんとうに指をくってみなければわからなかった。指折り数えてみるならば，人間の定められた寿命よりは長生きしたと言えるかも知れなかった。現在，よかれ悪しかれどこをみても，彼の目に襲いかかって来る，物の姿の変わり様，新規さ，奇妙さ，とりわけあらゆるものが巨大であることがひしめきあっているのも（彼はたびたび心のうちで思ったことであったし，またアリス・スタバートンにも話したことであったが，一世紀という歳月が経過しているのであれば，またもっと永く故国を離れ，自分の身の覚えのある以上に，よりいっそう心を他にうばわれていたなら，それも当然であったことだろう。）又更にまったく大まかな，物分りの良い態度で，十年ごとに輝やかしい変化があるということを考慮にいれていても，Brydon はほんとうのところ，なんら心構えのできていないことを知った。」

“He had been twenty-three on leaving New York——he was fifty-six today; unless indeed he were reckon as he had sometimes, since his repatriation, found himself feeling; in which case he would have lived longer than is often alloted to man. It would have taken a century, he repeatedly said to himself, and said also to Alice Staverton, it would have taken a longer absence and more averted mind than those even of which he had been guilty, to pile up the differences, the newness, the queerness, above all the bigness, for the better or the worse, that at present assaulted his vision wherever he looked.”

「彼は当然見出すであろうと思っていたものを見ることができなかった。彼は想像もしていなかったものを発見した。調和と価値が転倒していた。彼があまりにもいち早く，醜悪なものという感覚に目覚めた，過ぎ去った青春の日々の醜いもの，そういう醜いものを彼は予想していたのであった。——こういった説明のしようもない現象が，たまたま彼を，どちらかといえば魅了したの

であった。」

"He missed what he would have been sure of finding, he found what he would never have imagined. Proportions and values here upside-down; the ugly things he had expected, the only things of his far-away youth, when he had too promptly waked up to a sense of the ugly—— these uncanny phenomena placed him rather, as it happened, under the charm."

Brydon は今，止むに止まれぬ心に駆けられて故国に帰って来ていたのであった。

「彼は気取った言い方をするなら——彼の『財産』を見にやって来たのである。その財産を彼は三分の一世紀の間というもの，こうして四千マイルも離れたところに残したままにしてあったのである。また，あまりさもしくない表現を用いるなら，彼が常に，しかも気に入りの言葉として口にしていた，あの愉快な街角にある彼の家をふたたび見たいという気まぐれな気持ちに屈したのであった。その家というのは，彼が最初に日の目を見たところであり，その家で彼は家族の何人かが生活をしそして死んで行った。その家で，厳しい学校教育をうけた彼の少年時代の休暇が過され，冷え去った彼の青春の日の，幾人かの社交界の花たちが集まって来たものであった。その家は，その後長いあいだ，疎遠になったままであったが，彼の二人の兄たちが相次いで亡くなったり，昔の契約の満了ということなので，そっくり彼の手に転がりこんだものであった。彼はあまり『立派』ではないもう一軒の家の持主でもあった。——愉快な街角はもうずっと以前から，極度に拡張され，尊いものにされていたからである。この二つのものの価値が彼の主な資産を代表するものであった。」

"He had come ——putting the thing pompously——to look at his 'property,' which he had thus for a third of a century not been with in four thousand miles of: or, expressing it less sordidly, he had yielded to the humour of seeing again his house on the the jolly corner, as he usually, and quite fondly, described it——the one in which he had first seen the light, in which various members of his family had lived and had died, in which the holidays of his overschooled boyhood had been passed and the few social flowers of his chilled adolescence gathered, and which, alienated then for so long a period, had, through the successive deaths of his two brothers and the termination of old arrangements, come wholly into his hands. He was the owner of another, not quite so 'good'——the jolly corner having been, from far back, superlatively extended and consecrated; and the value of the pair represented his main capital..."

Brydon はこの家にたびたびやって来た。時には一昼夜のうちに二度もやって来ることがあった。彼の一番好んだ時間というのは，次第に夕闇のせまって来る黄昏時であった。短い秋の日の黄昏時であった。これは彼が自分の希望に満ちていることに気づく時であった。

III

"The Jolly Corner" は確かに格調の高い個人の自伝的な document とも言える部分もある。

「ぼくの若いころのひねくれた進路に——まあ，言ってみれば，父から勘当されることなんかものともせずに進んで行ったりしなかったら，また懐疑心や，心の痛みも覚えることなく，あの日から今日の日まで，あのように『むこう』になんか住みつづけていなかったら，とりわけ，自分のえらんだ道について疑いようもなく底知れぬくらいの自負心で，彼の地が好きになったり，愛したり，首ったけに惚れこんだりしなかったら，それとはなにか異質のものが，きっとぼくの生活や，ぼくの姿に別な影響を与えていたことでしょう。」

"Not to have followed my perverse young course——and almost in the teeth of my father's curse, as I may say; not to have kept it up so, 'over there,' from that day

to this, without a doubt or a pang; not above all, to have liked it, to have loved it, so much, loved it, no doubt, with such an abysmal conceit of my own preference: some variation from that, I say, must have produced some different effect for my like and for my 'form.'"

この述懐は James 自身の経歴と過去の生活に自伝的な関連があることは疑のないことで，James の若い頃の闘争と選択と流浪の消えやらぬ意識を再現しているようである。故国にじっととどまっていて，めいめいの境遇によって，激しくたたき上げられたり，あるいは才気走った者になったりしているタイプの人間達に近いものになっていたかも知れないと主人公は思ってみるのである。

「と言って，ぼくはそういう連中に大して敬意を払っているわけではありませんよ。彼らに，ぼくの心を惹きつけられるものがあるとすると，それはこの問題とはなんの関係もないことです。ただ，ぼくが判断を誤ってはならなかったぼく自身の本性の，気まぐれな，しかも完全に可能な開発が問題なのですよ。ちようど満開に咲く花が，小さな堅い苔でいるように，ぼくはそのころ，ぼくの心のどこか奥底に，奇妙なぼく『自身』の分身をもっていた，という気持ちを覚えるようになって来ました。そしてぼくの方は，自分の進むべき道をすすみ，そいつを気候のよいところに移してやった。そうしたことが，その時かぎり，そして永久に，そいつを枯らしてしまった。こういう気持ちを覚えるようになって来たのですよ。」

"It isn't that I admire them so much—the question of any charm in them, or of any charm beyond that of the rank money-passion, exerted by their conditions for them, has nothing to do with the matter: it's only a question of what fantastic, yet perfectly possible, development of my own nature I mayn't have missed. It comes over me that I had then a strange alter *ego* deep down somewhere within me, as the full-blown flower is in the small tight bud, and that I just took the course, I just transferred him to the climate, that blighted him for once and for ever."

こうして，ここまで読み進んで来ると，この内容の解釈の問題が出てくるであろうと思う。論旨を簡潔に運ぶために，Maxwell Geismar の言葉をかりることにしよう。つまり Geismar は，"The conventional social interpretation" と "The conventional Freudian interpretation"[4] というのであるという。James は上記のように書いているが，決して，James にとっても小説の主人公にとっても，アメリカと New York の生活が，Jamesや主人公が非常に愛したヨーロッパの生活よりよいものであったということにはならない。an expatriate として，外国に在住しないで，故国の New York で通俗的な意味で大成功する，言わば，robber barons となる道をえらんでおけばよかったということにはならない。今になってみれば主人公はどちらの道をえらぶことも出来たと感じているだけなのである。主人公が主人公に同情をよせている Miss Staverton に，"Would you like me to have been a billionaire?" とたずねた時，その答が "How should I not have liked you?" といったように，そのような人生航路をたどることも出来たということである。只，Jamesは若し彼が，故国アメリカを離れず，そこで生活をしていたら起ったかも知れない事を比喩談として書いたに過ぎぬというのが，普通に考えられる解釈で "the conventional social interpretation" ということになるのである。ところが，この James の作品のように意識と潜在意識の境域をさぐる種類のものとなると，潜在意識の部屋の中にあるものを引き出そうとすることになるので，フロイドの精神分析学の解釈が応用されることになる。[5] この解釈を "The converntional Freudian interpretation" と名づけることになるのである。このように Geismar は解明するのである。

IV

この "The conventional Freudian inter-

pretation" と名づけるものの批判をし結論を導き出す前に，更にもう少し James の作品そのものに注目してみよう。

Brydon は館にやって来る。

「彼はいつも，彼のステッキの鋼鉄のついた先端が，玄関の広間の床に敷かれた古い大理石にふれる，その最初の音のもたらす効果をとらえた。鋪石は，大きな黒と白との四角なもので，彼がまだ子供のころ，よくうっとりと見とれたものであり，今となって彼に解ったことだが，その当時彼に，様式というものについての，初歩の考え方を育成するのに役立ったものであることを覚えていた。その音の効果は，誰もはっきりと，どことういうことのできない——その家の，過去の，もし彼が，幸か不幸か，それを見すてるようなことをしなかったなら，彼の活動舞台になっていたかも知れない神秘的な別な世界のずっと奥深いところにでも釣るされてある，はるか遠くの鐘の音のように，かすかに反響する澄んだ音色であった。」

"He always caught the first effect of the steel point of his stick on the old marble of the hall pavement, large black-and-white squares that he remembered as the admiration of his childhood and that had then made in him, as he now saw, for the growth of an early conception of style. This effect was the dim reverberating tinkle as of some far-off bell hung who should say where?——in the depths of the house, of the past, of that mystical other world that might have flourished for him had he not, for weal or woe, abandoned it."

Brydon は自分の分身の幽霊を，この館でみようとする。

「彼の分身（歩いていた）——これが，彼自身の彼の幻影についての考え方であった。一方，彼自身の風変わりな慰みをはじめたことについて，彼が心に抱いていた考えは，そいつを待伏せして，正面からぶっつかってやろうという望みであった。」

"His *alter ego* 'walked'——that was the note of his image of him, while his image of his motive for his own odd pastime was the desire to waylay him and meet him."

Brydon が幽霊に出合う前後の描写は実に見事になされているが，遂に Brydon は幽霊に出合う

「しっかりと大きく指をひろげて，うまく顔を隠しているということが証拠ではないか？——指を大きくひろげ，ことさらに顔を隠しているので，その片方の手には二本の指がなく，まるでなんかの時に撃ち落されたかのように，木の根株のようになっているという，他のなにものにもまぎれない事実にもかかわらず，顔は充分に守られ，その面目を保っていた。」

"Wasn't the proof in the splendid covering hands, strong and completely spread?——so spread and so intentional that, in spite of a special verity that surpassed every other, the fact that one of these hands had lost two fingers, which were reduced to stumps, as if accidentally shot away, the face was effectually guarded and saved."

この箇所に，"The conventional Freudian interpretation" の問題が含まれているが，後述することにして，その幽霊の顔はどうであったか。

「その顔，あの顔は，スペンサー・ブライトンの顔なのか？彼は，なおもじっと見守っていた。しかし，得意の絶頂から，直逆様に転落しつつ，恐れと，その恐れを制しようとする気持ちから，眼をそむけていた。それは，未だ見たこともない，想像もできぬ，怖ろしい，この世にあろうとは思われぬものであった。彼は『裏切られた』のであった。このような獲物の跡をつけまわしていたことを，心のうちで悔んだ。彼の前にいる幽霊は幽霊であることに間違いなかった。彼の心の中の恐怖は，恐怖であることに間違いなかった。しかし，彼が幾夜も無駄に過したことは，今となってはただ滑稽なことであり，彼の冒険の成功は，ある意味では皮肉であった。そのような正体は，どう見ても，彼自身のには似たところがなかった一方の相手はまるで怪物のような姿であった。」

"The face, *that* face, Spencer Brydon's?——he searched it still, but looking away

from it in dismay and denial, falling straight from his height of sublimity. It was unknown, inconceivable, awful, disconnected from any possibility——! He had been 'sold,' he inwardly moaned, stalking such game as this: the presence before him was a presence, the horror within him a horror, but the waste of his nights had been only grotesque and the success of his adventure an irony. Such an identity fitted his at *no* point, made its alternative monstrous."

この怪物に激しく追い迫られ，主人公はひどい衝撃を受けて気持が悪くなり，主人公自身よりはたくましい生活力をもった人間の激しい呼吸づかいと，激しい意気と，それに参ってしまった自分自身の人間としての憤怒に圧倒されて，眼の前が直っくらになり，主人公は気を失ってしまうのである。

V

Maxwell Geismar も指摘しているように Clifton Fadiman のこの物語に対する意見は Dr. Saul Rosengweig の "The Ghost of Henry James: A Study in Themantic appreciation" における解釈とにかよっているもので，小説の主人公 James と自身とを密結し，James の個人的な意識や問題を詮索しようとするものである。Tames の生涯において，又，James 文学の解釈において常に問題になるのはあの若い頃の「不明の負傷」"obscure hurt"[6] で，これが，James 文学の特質をつくりあげた生涯における一つの出来事とみるのである。この事件は確かに James 個人にとっても James 文学にとってもそれらを解く一つの重要な鍵となることは当然であると思うのだが，"The conventional Freudian interpretation" では，甚だ大きく "close-up" するのである。即ち，"obscure hurt" なるものが，James の "normal sex relations" の経験をさまたげ，ついには，James に "sense of inpotence" を発展さすことになり，それが，ひいては，父や兄に対して自ら "inferiority" を感ずる原因となると解釈し，James は自分を "an unconscious malingerer" と信じさせたかも知れぬというのである。そしてこのことは，"a certain death" を象徴することになる。故国を撤退してヨーロッパに来たこの外的事件も，James の "another symbol of his death" であるというのである。そして James のこの若い頃の負傷と抑圧が James の後期まで尾をひいて，James の最後のアメリカ訪問となり，それは，この "ancient trauma" を再生さすための "a compulsive act" であったのだと解釈する。"The Jolly Corner" という作品が生れたわけも，ここに基点があって，"a Jamesian expatriate" の帰国を取扱ったもので，James 自身が経験し得なかったものへのあこがれと衝動を作品に再生しているものと解し，Spencer Brydon の幽霊は Brydon が (James が) 生きたかも知れぬ生き方を象徴するものであり，あの幽霊が二本の指を失っていたのは，あの "obscure hurt" を象徴するものであり，即ち「抑圧」の象徴であり，今，それが作品の表面に浮び出たものと解釈するのである。だから，この物語は，或種の "autopsychoanaysis" だともいえる。そして非常に無意識的であったという事実が James をして James の素材を芸術的に，又素材から隔離して眺めることを可能にしたとも云えるというのである。

この作品に限らず，他の多くの James の作品には，充分精神分析学の好材料となるものが多分に含まれている。殊に例えば今日迄多くの論争が行われて来た（多くの問題点を含む故に）"The Turn of the Screw" (1898)[7] にも，又 "Maud-Evelyn" (1900) にも，未完成の長篇 "The Sense of the Past" (1917) にも含まれていて，しかもその多義性が，読者に通俗的な出口を容易にあたえないため，或種の衝撃をあたえることになるのである。"The Jolly Corner" もこの種のものである。

そして，Geismar は Fadiman の見解に対して更に次のように論述するのである。

"Mr. Fadiman has again joined the bewitched, bemused and Circe-ish circle of

Jacobite commentators, at the loss, momentarily, one hopes, of his own normal intelligence. For there was no 'death of passion' in James's life or career, simply becanse he had never reached the point of passion. His whole view of sex and love was on the oral, infantile, pre-oedipal and pre-sexual level. His own attitude is consistently that of the pubescent (at best) voyeur, 'spying out' the hidden, mysterious, and ultimately sinful, area of 'adult intimacy'"

このように述べてから次に,

"There was no 'second death' in Henry James's withdrawal to Europe, simply becanse it was America which was always 'death' to James" と断言しているのは見事な見解だと思うのである。ここまで来て，いよいよ筆者の見解を論述し，結論を導き出してもよい段階に来たようである。

VI

最後に整理すべきことは,作品の主人公Brydonと，作者 James との関係であり，作品に出現する幽霊の解明とであるようだ。この物語が James の1904年から1905年へかけての最後の故国アメリカの訪問と関連があることは確かで，どのような解釈を下すにしても，この訪問が，この作品の構成の動機と機縁になったことで関連のあることは明らかであろう。けれども問題は簡単ではない。Saul Rosenzweig は "But like James during his visit in 1904—1905, Brydon is obviously attempting to rectify the past——to face it again and test the answer previously given. There is thus represented here not merely a harking back with vain regrets but an obvious effort to overcome old barriers and pass beyond them."[8] と述べているが，このあたりから問題が生れて来るようである。Brydon は James 自身だと同一視するところから問題が生れる。1905年，James は故国アメリカを旅行して8月英国に帰るが，"The Jolly Corner" はそれから4年後書かれている。この間 James は評論と紀行を主に書いている。即ち，"The Lesson of Balzac" (1905). "The Question of our Speech" (1905). "English Honrs" を書いて，1906年から全集版のため改訂をはじめ，又その序文を書きはじめている。1907年には "The High Bid" 〔"Summersoft" (1905) を劇化したもの〕に手がけている。1908年には，"Julia Bride" という a new and "modern" maiden の物語を手がけているが，この作品とは全然別固のものである。ところが1907年に書いた紀行 "The American Scene" は，"The Jolly Corner" とあわせ読むと興味がある。呼応するところがある。"The American Scene" は，すばらしい "imaginative reporting" であって，"restless analyst" の目は鋭い観察と記録を寸時もやめないのである。諸者は，"country clubs" や "Yiddish theatricals" や "Wall street tycoons" や "Boston society" などを著者と共に訪れることになる。言わば "restored absentee" の生き生きした印象の連続である。しかもこうして書かれている長い紀行の底に流れる「寂しさ」を又，「喪失感」を受けとるであろう。「印象派画家の筆致に似て，James は対象を，あるがままにしかもその生成の過程を含めて，たえず分析する」[9] のだが，かって見て知っていたニュ・ヨークもボストンもすっかり変ってしまっている。ただ Emerson についてのあたたかい思い出を抱いて Concord を再訪するのだが，ここばかりは昔のおもかげを多分に残し，「アメリカのワイマール」("American Weimar") と呼べる。又 Cambridge cemetery にある一家の墓に詣でて，その感情をあますところなく伝える抒情的な文章を "note-book" に書き込むのであった。懐しいものはほとんど消え去り，America は変ってしまっている。何か暗い，物質的な，悪のうごめく America と James の目にはうつる。そして，James は，このような America からのがれていた自分のヨーロッパへの "expatriation" を感謝さえしているのどある。どこを旅しても，the South Middle West を旅しても，the California

coast を旅しても，やはり受ける印象は "material" であり，"political power" は "cruelly charmless" なのである。

"The Jolly Corner" は，このアメリカに対する個人的態度をもっと明かに示すことになる。急速な発展を遂げているアメリカ文明の志向するところが，ひたすら物質的な目的であるという点を不満と思うのである。James は1903年5月24日兄 William に送った手紙に「長い間，アメリカを離れていたためと，又その間の変動から，今になって不思議にも自分の母国アメリカがロマンティッなクものとみえるようになって来た。かって夢の中で，私がこのヨーロッパにはじめて来た頃『ヨーロッパ』がいつも私にロマンティクであったと同じように。」と書いているが，いよいよ故国アメリカに帰った時，自分の目でみたアメリカは "The American Scene" のアメリカとうったのであった。"The Jolly Corner" を書く動機と機縁となった事は明かであろう。主人公 Brydon と James をことごとく同一視することは行き過ぎであろう。Van Wyck Brooks[10] の見解のように，James の生涯は巡礼のさすらいであったかも知れないがたとえそれが巡礼のさすらいであったとしても James はその落ちつくべきヨーロッパの伝統の栄光の中に文学的完成の道をたどったものといってよいのではないだろうか。(むろん James がアメリカのピユリタン精神を保持し，それが James 文学の背後をささえていたことは当然であるのだが。) 従って，主人公 Brydon と Henry James とを必要以上に同一視することは不自然な解釈となる。Rosenzweig-Fadiman thesis により James の奥底をさぐろうとすることはそれ自身 James 文学に接近する方法として応用してもかまわないが，あくまで "The Jolly Corner" は小説であることを忘れないようにしなければならぬと思う。Maxwell Geismar も見事に指摘しているように James の "The American Scene" や "The Jolly Corner" の結末をよく読めばわかることである。"James returned to America simply to confirm, to expand, to applaud and to celebrate the whole purpose of his European pilgrimage——as *The American Scene* shows without question; as the end of "The Jolly Corner" also proclaims."[11] 課題となる "obscure hurt" の問題も又それから起る James の生活そのものの問題も，James 自身には既に早く合理化されてしまっていることなのである。America は若い James にとって既に "death" であったのだから，James のヨーロッパ (生活) が "second death" となる訳がないので，"The conventional Freudian categories" に "The Jolly Corner" をむりやりに入れ込もうとすることは James の "motivation" にも，"temperament" にもそぐわないことになると言い得るのである。只，作品中の Spencer Brydon は二重意識 (double consicousnese) があったと言えるだろう。そして，その二重意識によって明かに当惑させられ，混乱させられる。自分の "actual self" についての意識一それはヨーロッパ生活において身につけた "mask" であり，他の一つは自分の幽霊についての意識——「なったかも知れない」self であろう。"actual self" の意識は外部世界に属するものであり，「なったかも知れない」"self" の意識は，自分が育った懐しい旧家から離れることの出来ないもので，街路から最も遠く離れた四階の奥の部屋において特に強烈となるものである。「懐しの街角」にあるこの旧家において幽霊を追いもとめた最後の夜，階段をのぼろうとした時，Brydon 自身の内部におこった争闘はこの二つの意識間の争闘である。alter ego の幽霊に出合い気を失った主人公 Brydon に Miss Staverton が言った言葉には二重の意味がある。Brydon にとっては意識を回復したという意味であり，読者にとっては，ヨーロッパで長く生活した Brydon を Miss Staverton が了解したことを意味するであろう。Miss Staverton の変らない愛情によってよみがえる "real self" がこの物語のおわりに残る。James の初期の作品に出る幽霊 (例えば "The Romance of Certain Old Clothes") は別だが，James の幽霊は一般の "terror tale" などに出現する幽霊のように無償のものでなく，Shakespeare の幽霊のように苦悩する人人にのみあらわれるのである。意識と潜在意識の境域を探

索した James の物語にはこの種の幽霊が必要だったのである。この "The Jolly Corner" は Henry James の後期の作品でこの意味において重要なものの一つである。

(1965. 4. 3)

註 "The Jolly Corner" の原作は諸種の出版社のものがあるが, "Henry James Seven Stories and Studies" New Nork Appleton-Century-Crofts, Inc. Edward Stone 編が入手し易い。猶, 拙稿論文中の引用訳文は河出書房新社版「世界文学100選」(巻 I) 中の土井治氏の訳文である読者の便宜をはかって原文に付加したのである。

1) "The Short Stories of Henry James" Selected and Edited with an Introduction by Clifton Fadiman. The Modern Library, New York. p. 641.
2) "Henry James The Major Phase" by F. O. Matthiessen. 1946. Oxford University Press. p. 136.
3) 拙稿「文学における影響の問題—Henry James の場合」(関西学院大学「英米文学」Vol. IX, No. 1) 参照。
4) "Henry James and his Cult" by Maxwell Geismar. 1964. Chatto and Windus, London. pp. 355—360 参照
5) 拙稿「Henry James 作 *the Turn of the Screw* の研究—所謂 "Hallucination" Theory をめぐって—」(関西学院大学「英米文学」Vol. II, No. 1.) 参照
6) 拙稿「Henry James 1843—1881—James (前期) の生涯と作風—」(関西学院大学「社会学部紀要」(第3号) 参照
拙稿「Henry James と Mary (Minny) Temple ——H. James の生涯の作風——」(関西学院大学「英米文学」Vol. VI, No. 1.) 参照
7) 註 5) と同稿参照
8) "The Ghost of Henry James; A Study in Themantic Apperception" by Saul Rosenzweig. 1939. New York, Oxford University Press, Inc.
9) "Henry James" by Leon Edel. No. 4 University of Minnesota Panphlets on American Writers. pp. 36—37
10) 拙稿「Henry James をいかに読むか——英米両文学史にまたがる巨匠の位置とその文学について——」(関西学院大学「社会学部紀要」(第9号10号) 参照
11) 註 4) と同書 p. 360.
猶 James の Style (文体) に関しては次の各各の中でふれている。
a) 拙稿「Henry James 作 "Watch and Ward" 論——この作品の性格と sexuality の問題——」(関西学院大学「論放」第9号)
b) 拙稿「Henry James 作 "The Spoils of Poynton" 論 ——人生と芸術・いかに生きるか——」(関西学院大学「社会学部紀要」第7号)
c) 拙稿「ジェイムズ文学における題材と手法の問題 ——T. S. エリオットのジェイムズ論と関連して——」(関西学院大学「論放」第11号)